

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成30年度病虫害発生予報第5号(8月)について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

予報第5号

カンキツのミカンハダニの早期防除に努めましょう。

県内のミカンハダニが多発しています。7月5半旬の調査での寄生葉率は、22.9%と平年の1.5倍高くなっています。ミカンハダニは増殖力が高いため、発生密度が高くなると防除が難しくなるので早めに防除しましょう。



ミカンハダニの被害果



葉裏全体に発生したミカンハダニ

<予想される向こう1か月の天候(平成30年7月28日~平成30年8月27日)>

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並30 高60% 高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み

(福岡管区气象台 平成30年7月26日発表抜粋)

8月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	8月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病(葉いもち)	少	少	並
	セジロウンカ	少	少	やや少
	トビイロウンカ	少	やや少	やや少
	コブノメイガ	少	少	やや少
大豆	ハスモンヨトウ	並～やや多	やや多	やや多
カンキツ	黒点病	並	並	並
	ミカンハダニ	多	多	多
ナシ	ナシヒメシンクイ	並	並	並
カキ	炭疽病	並	並	並
	フジコナカイガラムシ	並	やや多	多
果樹共通	チャバネアオカメムシ	やや多 (ヒノキ樹上、 前年比)	8月中旬 (果樹園への飛来予測時期)	
茶	炭疽病	少	少	やや少
	カンザワハダニ	並	並	やや多
	チャノコカクモンハマキ	少	少	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	やや少	やや多
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	多
	チャトゲコナジラミ	少	並	並
冬春イチゴ (育苗期)	炭疽病	並	並	少
	ハダニ類	少	少	並

- 注1) 予報の発生量は平年(福岡県の過去10年間)及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
- 注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生(－)、やや少発生(－～±)、並発生(±)、やや多発生(±～＋)、多発生(＋)として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。
- 注3) 果樹共通・チャバネアオカメムシの現況は、年次変動が大きいため前年比としている。

作物別発生予報

【普通作物：水稲】

1 いもち病(葉いもち)

(1) 予報の内容

発生量：平年より少・前年並

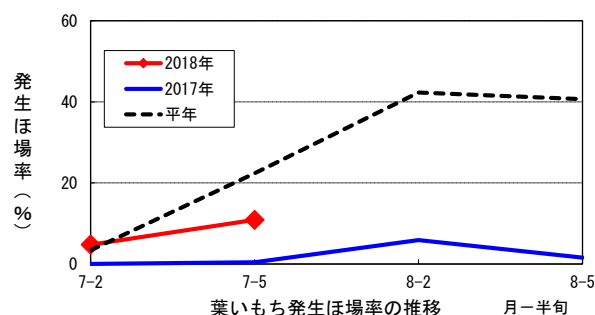
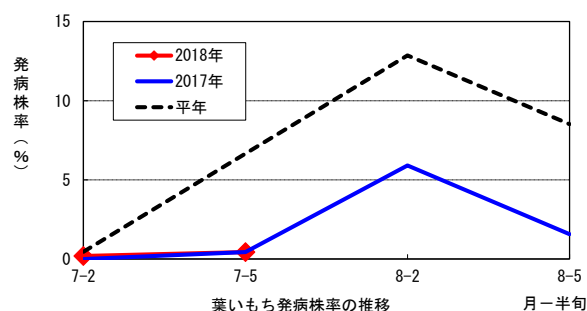
(2) 予報の根拠

ア 7月5日調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

発病株率 0.4% (平年 6.7%、前年 0.4%)

発生ほ場率 10.9% (平年 22.3%、前年 0.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上の注意

- ア 発生状況は地域・田植日・ほ場で大きく異なるため、本田の発生状況を必ず確認する。
- イ 本病は孢子形成量が多く、病斑が少なくても大量の孢子を飛散するので、発生しているほ場では、穂いもちの抑制のため、薬剤防除を徹底する。また、多発ほ場では穂肥を控える。
- ウ 穂いもちに対する薬剤防除は、出穂前の予防散布を基本とする。
- エ 農薬の使用および散布等にあたっては、p12の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

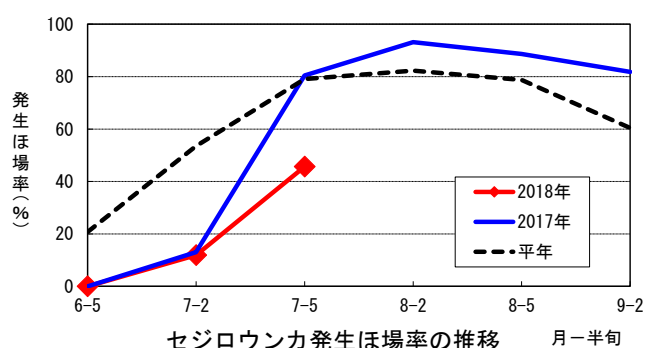
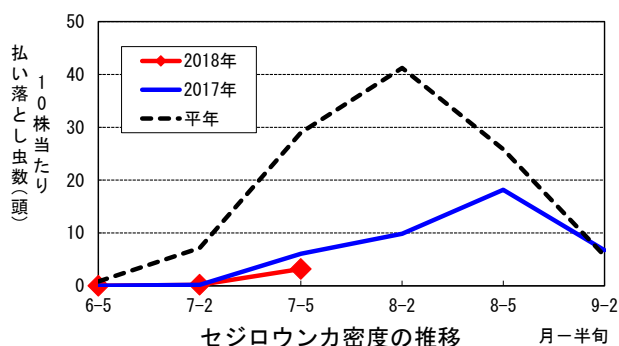
2 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
10株当たり払い落とし成幼虫数 3.2頭（平年 29.0頭、前年 6.1頭）
発生ほ場率 45.7%（平年 79.1%、前年 80.4%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上の注意

- ア 幼穂形成期～穂揃期に吸汁加害を受けると、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、もみ数の減少などの被害が生じるため、発生状況を確認し、幼虫の発生が多い場合は薬剤防除を実施する。

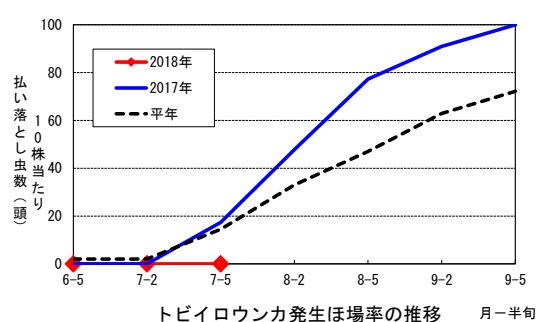
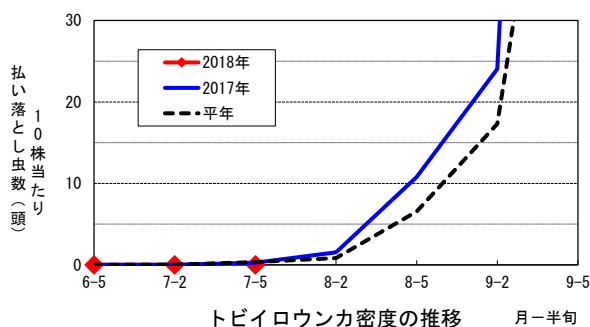
3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
10株当たり成幼虫数 0頭（平年 0.3頭、前年 0.3頭）
発生ほ場率 0%（平年 14.5%、前年 17.4%）
- イ 向こう1か月の気象予報ではやや多発生の条件になっている（±～+）。



(3) 防除上の注意

- ア 飛来時期・飛来量は地域・田植時期で異なるため、ほ場における発生状況の把握に努める。
また、8月以降急激に増加するため、発生パターン図（技術情報第3号）を参考には場での発生

状況を確認し、若齢幼虫発生期に防除を行う。
 イ 移植後1か月以上経過した場合、育苗箱施薬剤が施用されたほ場でも増殖しやすい。
 また、本種は株元に生息しているため、防除薬剤は株元に十分かかるように丁寧に散布する。
 ウ 無人ヘリコプター防除を実施する場合、薬剤によってはイネの株元に到達する前に蒸発し、防除効果が著しく低下するので、気温が高くなる前の早朝や気温が下がった夕方に実施する。

※要防除水準（中老齢幼虫合計値で示す）

飛来後第1世代：100株当たり 20頭以上（7月下～8月上旬頃）
 飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上（8月中～下旬頃）

4 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

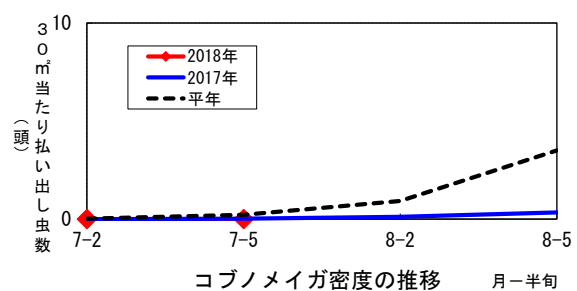
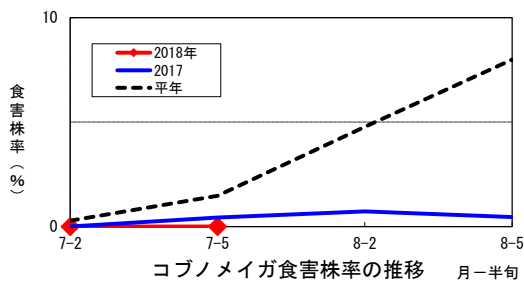
ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

食害株率 0%（平年 1.5%、前年 0.4%）

発生ほ場率 0%（平年 21.7%、前年 12.9%）

30㎡当たり払出し成虫数0頭（平年0.2頭、前年0頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上の注意

ア ほ場での発蛾状況を確認し発生が多い場合は最盛期から、一週間後に薬剤散布を行う。

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

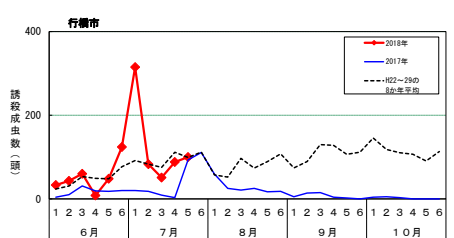
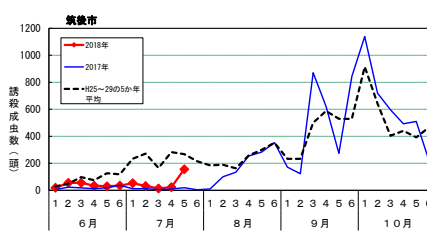
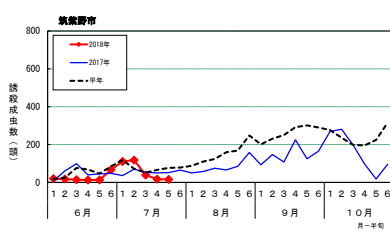
ア 7月1日半旬～5日半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は平年並～やや多かった（±～+）。

筑紫野市 301頭（平年 386頭、前年 261頭）

筑後市 278頭（H25～29年平均 1,220頭、前年 57頭）

行橋市 637頭（H22～29年平均 459頭、前年 143頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



(3) 防除上の注意

- ア 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから 10 日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認する。
- イ 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、盆前後から確認されるので、見つけ次第除去するとともに、白変葉の発生が多い場合は、薬剤散布を行う。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.5% (平年 0.5%、前年 0.2%)

発生ほ場率 30.0% (平年 31.7%、前年 30.0%)

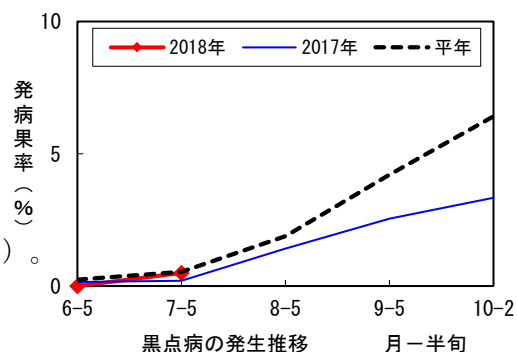
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。

エ 農薬の使用および散布等にあたっては、p12の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

寄生葉率 22.9% (平年 14.6%、前年 10.7%)

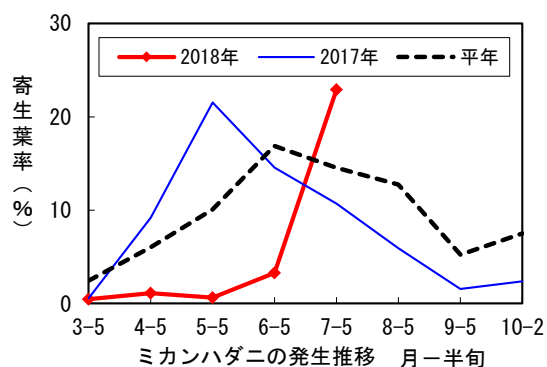
発生ほ場率 72.7% (平年 67.8%、前年 70.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 ナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

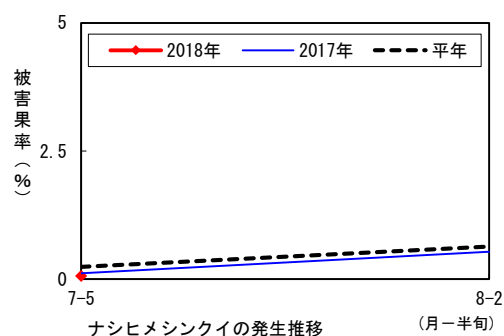
(2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生果率 0.06% (平年 0.24%、前年 0.11%)

発生ほ場率 9.1% (平年 15.1%、前年 11.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月上旬～中旬頃の発蛾最盛期に防除を行うが、防除後も成虫が多くみられる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除にあたっては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

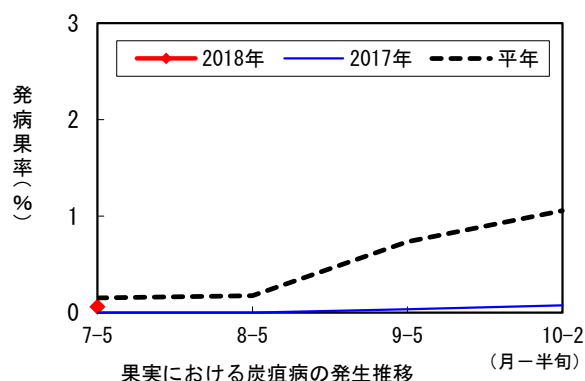
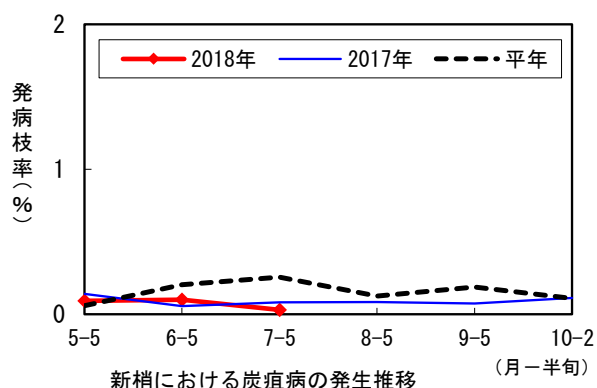
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
 - 発病枝率 0.03% (平年 0.26%、前年 0.08%)
 - 発生ほ場率 9.09% (平年 12.7%、前年 12.5%)
 - 発病果率 0.06% (平年 0.15%、前年 0%)
 - 発生ほ場率 9.09% (平年 10.2%、前年 0%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
- イ 連続降雨があった場合や前年の発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

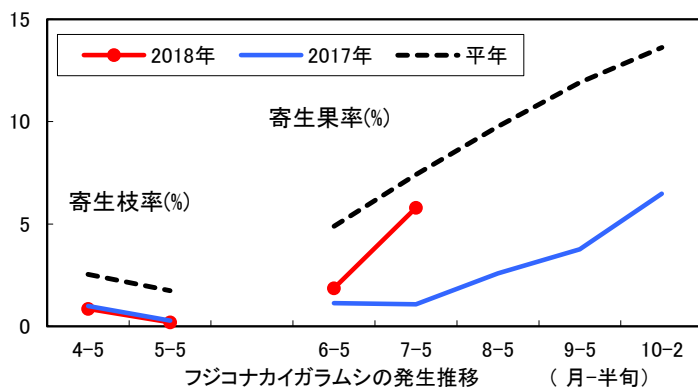
発生量：平年よりやや多・前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
 - 寄生果率 5.3% (平年 7.4%、前年 1.1%)
 - 発生ほ場率 90.9% (平年 81.8%、前年 62.5%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 天敵への影響が比較的少ない薬剤を選択する。果樹カメムシ類防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

平成30年7月25日付30農林試第2339号平成30年度病害虫発生予察注意報第2号参照。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	現況 (発生量)	8月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
なし ハダニ類	並	並	やや少	・薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
かき カキノヘタムシガ	並	並	並	・発生の多い園では、8月上～中旬の防除を徹底する。 ・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤はかかりムラがないよう十分量を丁寧に散布する。 ・ハマキムシ類の発生が多い園では、8月上旬～中旬の防除を徹底する。
ハマキムシ類	並	並	並	

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

1㎡当たり発病葉数 0.03葉(平年1.4葉、前年0.4葉)

発生ほ場率 10%(平年33%、前年40%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(±~+)。

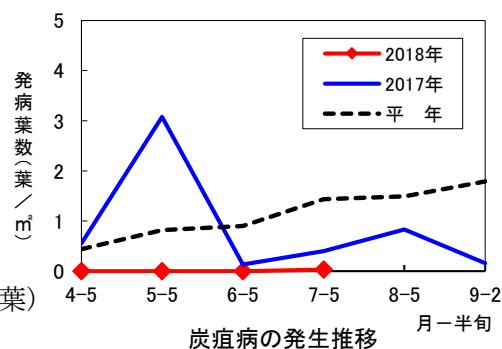
(3) 防除上の注意

ア 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

特に、最終摘採後の新芽(秋芽)に対する防除を行う。

イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



エ 農薬の使用および散布等にあたっては、p12の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生葉率 0.4% (平年 0.26%、前年 0.2%)

50葉当たり虫数 1.7頭 (平年 0.38頭、前年 0.1頭)

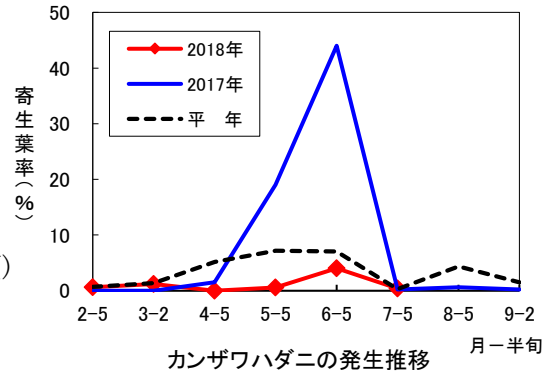
発生ほ場率 10% (平年 8.8%、前年 10%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、多発する前に速やかに防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

被害葉数 0.23葉 (平年 1.0葉、前年 0.83葉)

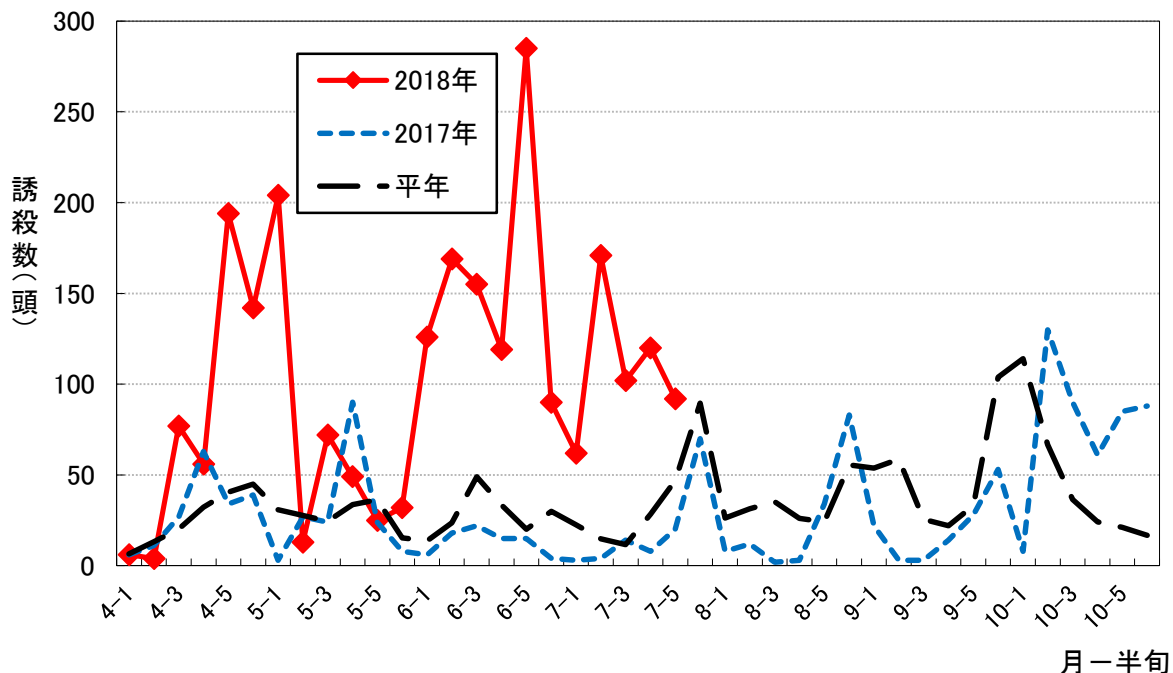
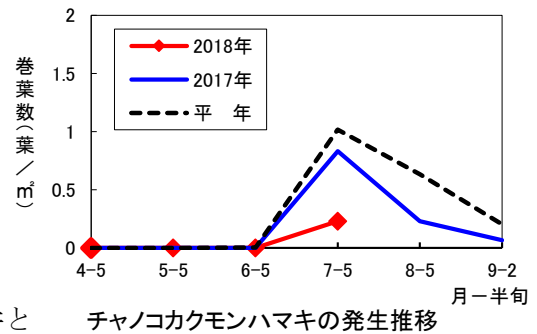
発生ほ場率 30% (平年 40.8%、前年 60%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

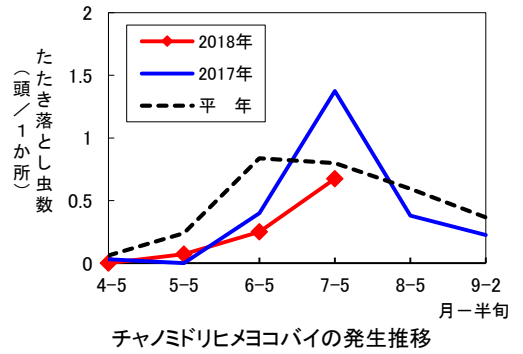
イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(八女市立花町)

4 チャノミドリヒメヨコバイ

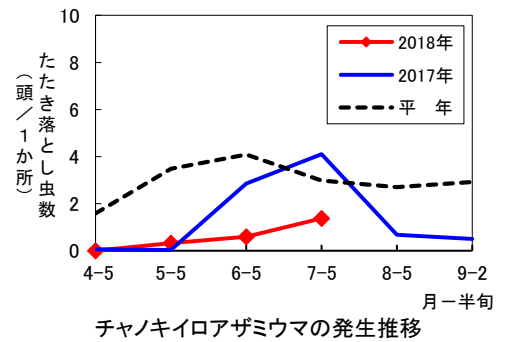
- (1) 予報の内容
発生量：平年やや少・前年よりやや多
- (2) 予報の根拠
 - ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。
たたき落とし虫数 0.7頭(平年0.8頭、前年1.4頭)
発生ほ場率 50%(平年62.6%、前年70%)
 - イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。
- (3) 防除上の注意
 - ア たたき落とし（B5版上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。
 - イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
 - ウ 効果の高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



※ 畝の雨落ち部4か所の枝をたたき、B5版上に落ちた虫の数を平均。

5 チャノキイロアザミウマ

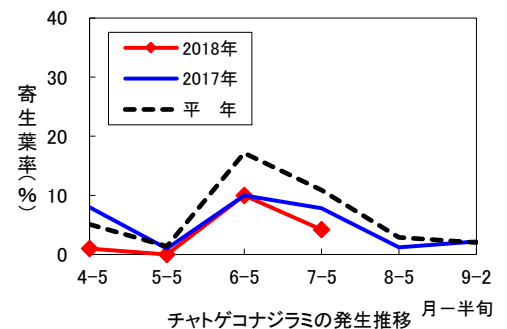
- (1) 予報の内容
発生量：平年並、前年より多
- (2) 予報の根拠
 - ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。
たたき落とし虫数 1.4頭(平年3.0頭、前年4.1頭)
発生ほ場率 80%(平年78.6%、前年90%)
 - イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±）。
- (3) 防除上の注意
 - ア 発生状況に留意し、たたき落とし（B5版上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。
 - イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



※ 畝の雨落ち部4か所の枝をたたき、B5版上に落ちた虫の数を平均。

6 チャトゲコナジラミ

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
 - ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
寄生葉率 4.2%(平年10.9%、前年7.8%)
発生ほ場率 30%(平年33.2%、前年30%)
 - イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



- (3) 防除上の注意
 - ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生を繰り返す。防除適期は若齢幼虫発生期であり、親世代成虫の発生ピークが収まった頃である。直近の成虫（第2世代）発生ピークは、9月上～中旬頃と予想される。
 - イ 幼虫は葉裏に寄生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。

【茶：その他の病害虫】

病害虫名	現況 (発生量)	8月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
チャノホソガ	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 ・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

【野菜：冬春イチゴ（育苗期）】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病株率 0.03% (平年 0.10%、前年 0.08%)

発生ほ場率 14% (平年 9%、前年 14%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場をこまめに見回り、発病株や周辺株を速やかに除去・処分し、発病の拡大防止に努める。

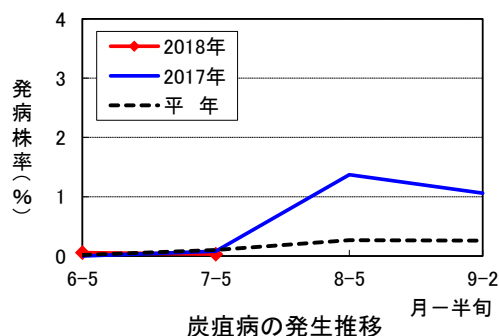
イ 苗の湿度が高いと発病しやすく、雨媒伝染により感染が拡大するため、苗の間隔を空け風通しをよくする。

ウ 窒素肥料を多用すると発病しやすいため、適正な肥培管理に努める。

エ 発病後に治療できる薬剤はないことから、感染を防ぐため、定期的な予防散布を徹底する。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション防除を行う。

オ 夜冷短日や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に生育状況を確認し、健全苗を選抜する。また、入庫前のかん水は過度にならないよう、入庫時には苗を詰めすぎないように注意する。

エ 農薬の使用および散布等にあたっては、p12の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より少・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生株率 1.0% (平年 7.0%、前年 4.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

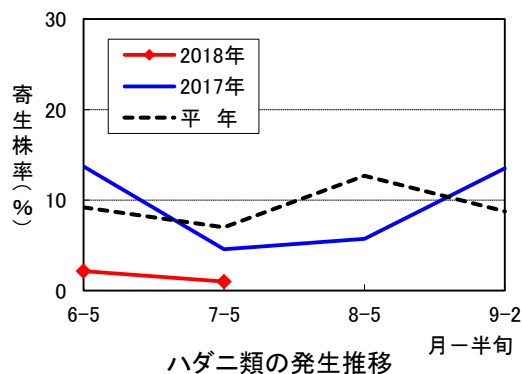
(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れて密封し、処分する。

ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

エ 感受性が低下しているため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション防除を徹底す

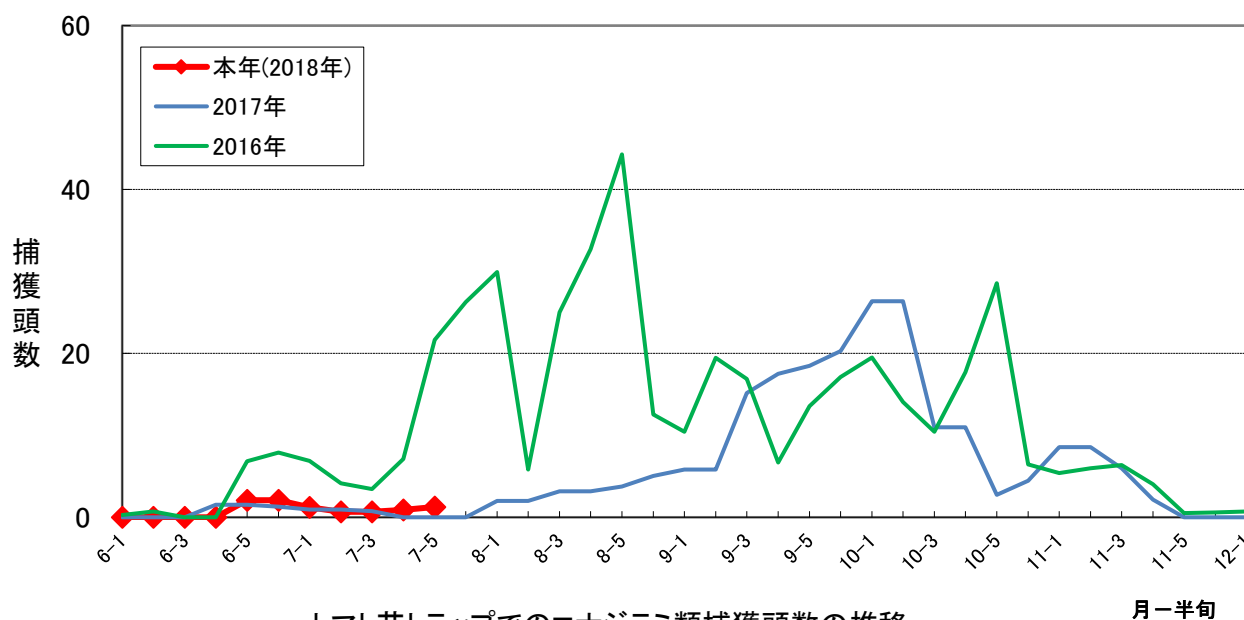


る。また、葉裏に農薬が付着するよう、下葉かき後に防除を行う。
 オ 夜冷短日や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に必ず防除を行い、本ばにハダニを持ち込まないようにする。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通 コナジラミ類	—	—	並	<ul style="list-style-type: none"> • 早期発見に努め、初期発生からの薬剤防除を徹底する。 • 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

※2015年より調査のため平年値はなし。



トマト苗トラップでのコナジラミ類捕獲頭数の推移
(筑紫野市吉木)

※平成27年(2015年)より調査のため平年値なし

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗淨

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗淨する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。

福岡県病害虫防除所



最新の病害虫発生状況